

季寄せ—草木花

秋下

選・監修 加藤楸邨
写真 富成忠夫
解説 本田正次



季寄せ——草木花〔秋・下〕

朝日新聞社編

定価 一八〇〇円

発行

昭和五十四年十一月一日第一刷
昭和五十四年十一月二十日第二刷

発行者

朝日新聞社 波多野公介

発行所

東京 名古屋
大阪 北九州 朝日新聞社

印刷所 凸版印刷株式会社

©朝日新聞社一九七九

季寄せ—草木花

選・監修 加藤楸邨／写真 富成忠夫／解説 本田正次

朝日新聞社



選・監修	加藤楸邨
写真	富成忠夫
解説	本田正次
植物画	佐藤達夫
例句選	加藤知世子
装幀 レイアウト	多川精一
題字	川口芝香



春〔上〕



春〔下〕



夏〔上〕



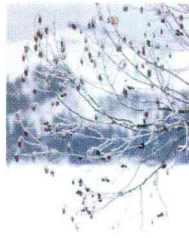
夏〔下〕



秋〔上〕



秋〔下〕



冬

お読みになる前に

●このシリーズは、七巻（秋上・下・冬・春上・下・夏上・下）で構成しており、この巻は秋の下です。

●秋は立秋（八月八日ごろ）から立冬（十一月六日ごろ）まで。季節のわけ方は従来の歳時記に準拠し、開花の時期などが大幅に違うものは解説にそれを説明しました。

●季語は草、木、花に限定しましたが、一部なじみの深い菌、藻も植物季語として含まれています。

●季語の配列は、東京を中心に花や実を見るのが早い順とし、たとえば一秋中咲いている花などはその咲き始めの時期をとり、本田先生に配列していただきました。

●季語は俳句でよく知られているものを主見出しとし、別名、異名、方言名、古名などを併記しました。見出し季語の右側に現代仮名、左側に旧仮名をつけ、別名などは現代仮名に統一しました。

●例句は原作通りとし、仮名づかいは原作に従いました。漢字は原則として新字体とし、新字体のないものは旧字体にしました。

●例句のルビは、原作についているものはそのまま生かしました。読みやすくするために編集部でつけたものもあります。

●解説は植物の標準和名に統一しました。季語と植物解説との見出しが一致しないのは、解説は正しい植物名で、季語は俳句でよく使用されている呼び名を優先的に採用したためです。

●植物名の漢字は論議の多いところですが、できるだけ漢字で表記し、従来よく使用されているものの、明らかに間違っているものは除外しました。

●例句は季語にふさわしい句を収集、選句したものをとに、各巻の監修選者がさらに編集に合わせて選びました。

●例句は古典は名（号）だけ、現代俳句は姓名とし、配列は、原則として古典を先にしましたが、必ずしも年代順ではありません。

●季語索引には秋上と秋下とを合わせ秋全体の季語をのせました。

目次

野菊／9	貴船菊／36	梅檀の実／67	榛の実／85
刈萱／17	鴨上戸／37	檀の実／67	胡桃／86
玉蜀黍／18	みせばや／38	団栗／68	榎槿の実／87
稗／20	蒲の絮／39	椎の実／70	茨の実／89
黍／21	菊／41	杉の実／70	万年青の実／89
粟／22	晚菊／42	海桐の実／72	茱萸／91
甘藷／23	残菊／43	金柑／73	まてば椎／92
砂糖黍／25	木の実／45	一位の実／75	橡の実／92
草棉／25	銀杏／47	隼人瓜／75	榧の実／94
草木瓜の実／26	紅葉／49	珊瑚樹／76	皂莢の実／95
通草／27	草紅葉／58	オリーブの実／77	枸杞の実／96
蓮／29	枳椇／59	水草紅葉／78	柁の実／96
瓢の実／30	柿／60	鸛の実／81	錦木／98
水木の実／31	紫式部／62	仏手柑／81	無患子／99
栗／32	榎の実／63	藤の実／82	梅擬／100
林檎／33	菩提子／64	ななかまど／83	蔓梅擬／101
吾亦紅／35	櫨の実／65	棕の実／85	茸／103



種

椎茸／104

竹の春／109

落穂／112

榲桲／115

松茸／104

銀杏／110

柳散る／112

枳殻の実／115

湿地／106

薤の花／110

五倍子／113

菱の実／115

舞茸／107

無花果／110

落花生／113

毒茸／108

新松子／111

魯／113

胡麻／109

木賊／111

小豆／114

木瓜の実／109

末枯／111

檸檬／114

木瓜の実／109

破れ芭蕉／112

朱欒／114

花前線／カエデ——大後美保／6

吾亦紅——佐藤達夫・画／116

日本人の植物好き——山田宗睦／117

歳時記のおもしろさ——大岡信／122

オミナエシの姿と名前——前川文夫／127

植物語源考② 和名とその由来——中村浩／131

草・木・花と私——秋の句をあげて——加藤知世子／136

索引／138

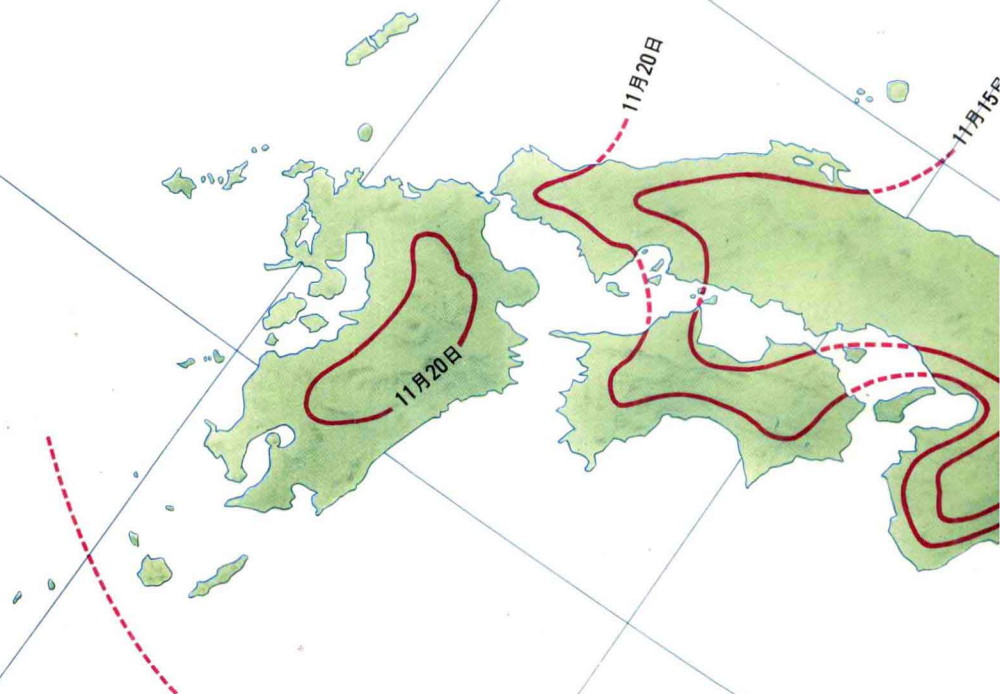
編集ノート／143

花 前 線



カエデの紅葉始め

ここであるカエデとはカエデ属植物の総称であるから、厳密に言えば、紅葉の対象となっているカエデの種類は地方により多少ちがう。秋に入り、最低気温が八、九度以下になるとカエデが紅葉しはじめる。紅葉は葉のつけねのところに離層ができ、このため葉の炭素同化作用でできたデンプンや糖類などの炭水化物が葉から茎へ転流しにくくなって、花青素という紅色の色素が増えるからである。秋晴れが続くと、朝がたは冷え込み、離層が発達し、日中は日光を受けて炭水化物が多量に生産される。日本の秋の気候は紅葉に好適であるから、その美しさは、世界でも冠たるものといえよう。沖縄は本州と樹種が違うので、紅葉の代表としてナンキンハゼをとりあげた。



紅葉南限

ナンキンハゼ紅葉始め
1月下旬～2月上旬



野菊のぎく

粟黄金菊あわこがねぎく 浜菊 小浜菊 竜腦菊りゅうのうぎく 野路菊
油菊 磯菊 野紺菊 嫁菜

子狐のかくれ貌なる野菊哉

蕪村

草の中に野菊咲くなり一里塚

正岡子規

初恋

おもかげのかりに野菊と名づけんか

高浜虚子

わが傘の影の中こき野菊かな

杉田久女

野菊は左右へ撥ねては直る乙女行く

中村草田男

頂上や殊に野菊の吹かれをり

原石鼎

蕊を突き上げて野菊の花終る

高浜年尾

少年帰心野菊の下をいそぐ水

加藤かけい

〔野 菊〕

山野に野生しているキクの仲間という意味であり、ノギクという名のついた特定の植物を指しているわけではない。すなわちキク属、コンギク属、ヨメナ属などに分かれていて、おもに秋に開花する種類の総称である。ノジギク、アワコガネギク、イソギク、リユウノウギク、アブラギク、ヨメナ、シロヨメナ、ヤマシロギク、ユウガギク、ノコンギクなどがそのおもなものである。

〔アワコガネギク〕

アブラギクが西日本に多いのに対して、アワコガネギクは主として東日本の山地や山麓に多いキク科の多年草である。花色は黄色、アブラギクの半分くらいの大きさで、十月ごろから晩秋まで咲き続ける。別名のキクタニギクとは、京都東山の菊溪きくせきの菊という意味である。岩手県から京阪地方、和歌山県までと、離れて北九州に分布する。



降るらしといそぐこの道野菊咲く

想い出はみな古り野菊畦に咲き

野菊のみたくましと見し雨の野路

底暗き藻に映りある野菊かな

地藏堂声無き声と野菊かな

磯菊が蕾めり安房の舟溜

黄に光り磯菊巖頭に咲き吹かる

一系の浜菊岩に縋り咲く

浜菊の花は吹きあげらるる花

浜菊の咲くや遅々たる浦の秋

三笠宮ゆかり

岸風三樓

川島彷徨子

米沢徳子

伊槻健

阿部筭人

新井石毛

永野孫柳

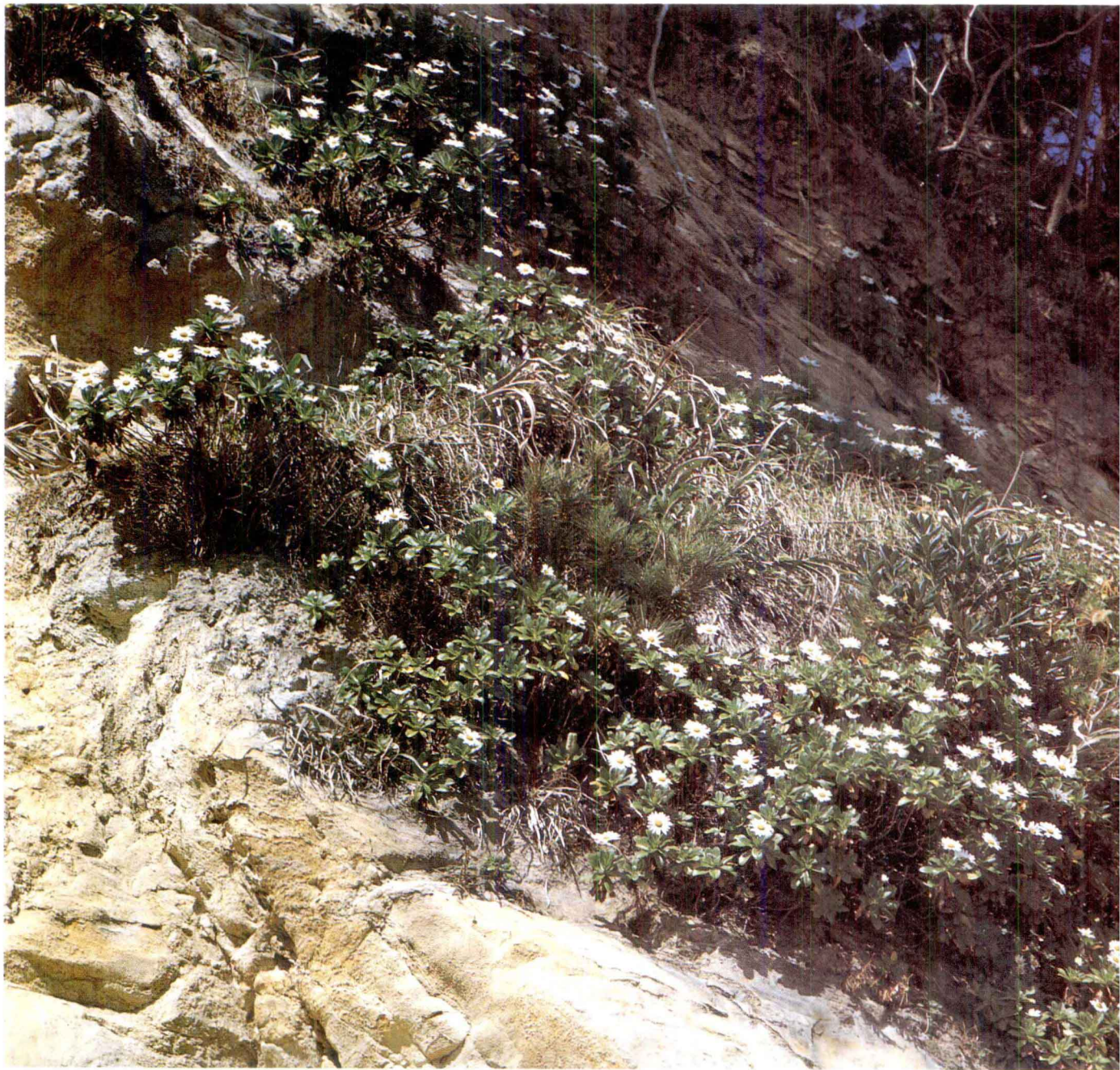
只野柯舟

小杉余子

〔ハマギク〕

青森県から茨城県までの太平洋岸の断崖や砂浜に野生する野菊の一種で、名は浜に生える菊の意味。直径約六センチの白い頭状花は、たいへん見事で栽培もしやすいため、古くから園芸化されていた。一六八一年に出版された『花壇綱目』、一七一三年の『和漢三才図会』にも図がでている。ハマギクは草ではなく低木で、高さは約一メートルにもなり、基部から盛んに分枝するが、地下茎を伸ばしてふえるわけではない。ちぎれた枝が、海岸の砂にうずもれると新苗になるが、種子でもふえる。葉はへら形で、長さ五センチから九センチ、縁に鋸歯があり、肉質で表面には光沢がある。九月から十一月にかけて咲く頭状花は、枝の先に一個だけつき、長い柄がある。中央の管状花は黄色で両性、白色の舌状花は雌性だが、ともに結実する。総苞片は四片で覆瓦状、果実は長さ三、四ミリ。コハマギクは別種。







〔コハマギク〕

名前から連想するハマギクとはまったく別の種類である。ハマギクが青森県の太平洋岸以北には野生しないのに対し、コハマギクは茨城県の一部を例外として、根室から太平洋岸に沿って青森県の竜飛崎まで幅広く分布する。日当たりのよい崖や砂地に多く、美しく丈夫なキク科の多年草である。

茎は高さ十から五十センチで長い根茎があり、互生する葉は卵形で浅く羽裂している。九月から十一月にかけ、直径五センチぐらいの頭状花を開くが、舌状花は白色で、長さは約二センチぐらい、のちには紫紅色に変わる。高さはハマギクよりも低く、花も小さい。低木であるハマギクに対して、コハマギクは草本である。

〔リュウノウギク〕

竜腦というのはテルペンの代表的なもので、かつては高貴な薬品として、また薫香や香料として用いられた。その竜腦にも似た香りのする野生のキクという意味で、この名がついたのであろう。リュウノウギクは十月から十一月のころ、東北地方の南部から四国、九州にかけての日当たりのよい山野の崖地を好んで、白い花を開くキク科の多年草である。

茎は細く高さ四十から八十センチになり、葉は卵形で縁が三裂し、大きな鋸歯がある。頭状花は直径二・五から五センチで、総苞片は三裂している。その姿は家に栽培する小菊に似た楚々たるもので、ときには淡紅色や黄色の花もないわけではないが、やはり澄み渡った秋空の下では、真っ白な花こそリュウノウギクの身上といわなければなるまい。



〔ノジギク〕

兵庫県の郷土の花として名を売り出したが、最初の発見は高知県で、明治十七年、牧野富太郎博士が、郷里に近い当時の吾川郡川口村で見つけたものである。それは博士が弱冠二十三歳のときのこと、発見の場所は海岸から遠くはなれたところだから、海岸に野生するノジギクがあつたのはむしろ珍しいことだった。その後、山口、広島、兵庫各県の海岸や九州の海岸に野生していることがわかった。塩田の土手や石垣に、垂れ下がるようにして咲いているノジギクの眺めはすばらしかったが、塩田が少なくなった今日では、この景観もあまり見られなくなったのではないだろうか。十月から十二月にかけて直径三、四センチの白い花を開くが、頭花はゆるい散房状につく。舌状花は雌性で一列だが、まれに二列のものもあり、筒状花は両性である。

〔アブラギク〕

いわゆる野菊の一種で、西日本の日当たりのよい山麓や、海岸の崖地などに野生している。茎の高さは三十から八十センチになり、ふつう紫黒色をおびている。葉は栽培ギクによく似ているが小形である。十月から十二月まで黄色の頭状花が咲き続けるが、まれに白花もある。

頭状花はやや多く散房状につき、直径二・五センチぐらいで花柄は細い。総苞片は四列で屋根瓦のように重なり合っている。栽培ギクのなかにはアブラギクを改良したものがある。地域的な変異もあり、愛媛県北部にはイヨアブラギクが、山口県から富山県にかけてはサンインギクが分布する。アブラギクの名は、この花を油に漬けて傷薬とするからで、シマカンギク、ハマカンギクの名もある。





〔イソギク〕

秋になると日本のいたるところの海岸で、キクが咲き乱れる。浜辺に多いキクの中で、西の代表をノジギクとすれば、東の代表はこのイソギクである。海岸性の野生ギクの一つで、千葉県の犬吠埼から、静岡県御前崎までと、伊豆諸島にも野生している。海岸の崖地を好んで生えるキク科の多年草である。高さは三、四十センチぐらいで、葉は切れ込みが少なくて密生し、上面は濃緑色であるが、下面は白くて厚みがあり、見るからに海岸植物らしい姿をしている。十月から十一月のころ、黄色い小さな頭状花が茎の上部に集まって開くが、舌状花は筒状で先には三、四歯がある。葉の形がくさび形で、遠くから見ると銀白色をしているのがキクと異なる点で、品種改良の際の親として使われる。花が小さいので菊人形の着物などを作るによく、早くから知られた栽培もされていた。一七一七年に出版された『広益地錦抄』には、岩菊一名泡菊として図解と記事があり、当時栽培されていたことは明らかである。また一八二八年の『本草図譜』では九牛草、シモカツギ、キラクサとして図が見え、これはイソギクとキクの雑種かもしれない。実際、千葉県や神奈川県海岸には雑種が多く、また日本海側の砂地でも、栽培のものが逃げ出して野生化したものが多く、なかでも美しいのは、長崎県の壱岐で見つかったイキノカンギクである。



〔ヨメナの花〕

野原や田の畦などに多い丈夫なキク科の多年草で、地下茎を伸ばしてよくふえる。本州の中部以西と四国、九州に分布している。茎の高さは、三十センチから一メートルになり、上部でよく分枝する。葉は厚く、上面の縁にわずかに毛があるほか、ほとんど無毛で光沢がある。七月から九月にかけて、直径三センチぐらいの薄紫色の花をたくさんつける。果実の冠毛はごく短く、〇・五ミリぐらい。ないこともある。古名をウハギとか、オハギといい、『万葉集』にはウハギの名で、春の若菜摘みを歌ったものがある。古くから若菜が食用にされており、いまでもゆでてきざみ、塩味のヨメナ飯にする。このほか汁の実、和えもの、おひたし、油いためなどにも使える。名は嫁菜の意味で、食べると美味で、花がやさしく美しいところからきたものであろう。

〔ノコンギク〕

キク科の多年草で、山野でふつうに見られるいわゆる野菊の一種である。名は、野に咲く紺色の花をつけるキクの意味である。高さは五十センチから一メートル、よく分枝する。頭花は淡青色で、直径二・五センチぐらい。舌状花が濃紫色の品種をコンギクといい、古くからの園芸植物である。春の若苗はヨメナに似ていて、同じようにゆでて食べるが、葉がざらつくので区別できる。また果実での見分け方は、冠毛の長さがヨメナはわずか〇・五ミリなのに対して、ノコンギクのはうは長くて、四ミリから六ミリあるので、すぐに区別できる。ノコンギクの小形で、高さ一五センチから二十センチ、花をたくさんつけるものをコマチギク（小町菊）といい、これも栽培されている。